
バカとエクソシストと召喚獣《イノセンス》

きこりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとエクソシスト（イノセンス）と召喚獣

【NZコード】

NZ649N

【作者名】

きじりん

【あらすじ】

「君たち、学校に行つてみないかい？丁度良いところがあるんだ」コムイの計らいで、初めて学校に通うことになつたアレン、神田、ラビ、リナリー。しかし彼らが通う学校 文月学園 は、ちよつと変わつた学校だつた。 バカテスの世界にDグレティーンズが参戦！そしてコムイの計らい（策略）はこれだけではなかつた！？ギャグコメディ風味、バカとエクソシスト（イノセンス）と召喚獣！！

【第一話】不安な呼び出し～アレン・ウォーカー（前書き）

はじめまして、さじりんです。

今回はクロスオーバー作品、バカとエクソシストと召喚獣を
のんびりですが進めて行こうと思います

拙い文ですが、よかつたら読んで行ってください。^_^(ーー)^\n

【第一話】不安な呼び出し～アレン・ウォーカー～

ある晴れ晴れとした夏の日の廊下がり
白髪の少年アレン・ウォーカーは、いつも一緒にいるティム・キャン
ピーと共に室長室へ続く薄暗い廊下を歩いていた

：いかにも嫌そつこ

それと並ぶのも今から20分ほど前

食堂で山盛りの食事を田の前にして至福の時を過げていたアレン
のもとに、任務ではない呼び出しが伝えられたことによるものだっ
た。

「アレン、室長が呼んでいたぞ。食事が終わってからで良い
から来い」とさ。

「任務じゃないんですか？」

「どうやら違ひじこ。俺も詳しこじてないからなあ」

リーバー班長から伝えられたそれは、アレンに苦く過去を思に出さ
せる。

むりさん、たびたび教団を壊滅させそつくなる問題児（？）、コグイ
がらみの事件である。

伝えに来たリーバーも、眉を八の字にして「まつたく室長は……」と
ため息をつきそうな雰囲気だった。

いや、言っていたかもしれない

そんな経緯で、しつかりと昼食を食べ終えたアレンは室長室へ向かっていた。

重そうな、しかしいつもあけ慣れている室長室の扉の前に立ち、「いや、待てよ」と考えなおす。

ここまでマイナスなことばかり考えてきたが、曲りなりにもコドイ
はここ黒の教団をまとめる人間（のはず）だ。もしかしたらこの呼
び出しある、僕とリーバー班長の予想に反して、何か（危険なことじ
ゃない）重要なことかもしれない。

そう思い、「大丈夫だよね」と頭上で羽ばたくティムキャンパーに
声をかけたアレンは
室長室の扉をゆっくりと押し開けた。

【第一話】不安な呼び出し～アレン・ウォーカー～（後書き）

おじさん「お初にお目にかかります、おじさんです」

アレン「バカとエクソシストと召喚獣、始まりましたね」

き」つん「長くて言いづらいから『バカエク』でいいよ」

アレンーなんだかその響き、府に落ちないのですが……まあいいや。」「

れいじん(れいしんたゞへへ;)

アレン、もう少しだけ、なんで僕が後書きをこなしておるんです?」

老」りん「それはね…樂しそうだから」

アレン、正直に書いてください。どなたかを真似てるでしょう?」「

きこりん「う…だってリスクしてる色々な方々の小説見て、やりたくないんだよお」

アレン「マリホーク」

き」りん「いえ、リスペクトです。」

アレン「まあ、いいです。もう二つひとつお預けしちゃう」

わいわん「さすがアレンさん。お心が広い」

アレン「紳士ですか、」

セイジちゃん（血分で血のつか…）

アレン「血わせたのはあなたでしょ、ハヘ。」

セイジちゃん「？」

アレン「とにかくで、こんな年少ながらな作者への質問、意見等があつまつたり」

アレン・セイジちゃん「お待けしておつます…。」

セイジちゃん（なんかそれとなべべれりヒセたが…？）

【第一話】不安な呼び出し～神田ノカ・カラ～（前編）

第一話は神田視点で、お呼び出しのシーンです

ちなみに作者はログレもバカテスも
原作が手元にありません（殴

そんな中で進めているので原作丸無視や
捏造じじいの話じやなくなりそうですが；；

…受験終わったら揃えよつかな

【第一話】不安な呼び出し～神田ユウ・ラム～

いつものように教団の敷地内にある森で六幻をふつていた神田ユウの「ゴーレム」に通信が入った。

『神田くーん、都合がいい時でいいから僕のところまで来てくれるかな?』

「何の用だ?」

キッヒ「ゴーレムを睨み付け、声の主であるコムイに問ひ。

任務ならば任務だと、コムイは言はずだ。

任務以外の事で鍛練を遮られた恨みのようなものが、神田の、ゴーレムの向こうにいるであろうコムイを睨み付けるまなざしに含まれていた。

『来てくれてから話すよ』

それだけ言つと、一方的に通信は切られた

しばりくそそのまま、神田の田の高をこころ「ゴーレム」を睨み付けていたが、

通信のせいで集中力が切れたのだらう。

ちつ、と舌打ちをしてから六幻を鞄におさめた神田は高く結いあげてある彼の長い髪をなびかせて教団の建物の中へ入つていった。

「お、ユウもコムイに呼ばれたんだ?」

神田が教団の廊下を室長室に向かつて歩いていくと、ふいに背後から声をかけられた。

「俺のファーストネームを口にするんじゃねえ

ギッと神田が睨みつけた先にいたのは、赤毛で、右目に眼帯をしているラビだった。

「おお、こわ。」と、肩をすくめながらと神田の視線を受け流したラビは言葉を続ける。

「ところで、なんで呼ばれたか聞いてるさ?」

「知らん

「やつぱりかー

頭の後ろで手を組み、先に歩き出した神田の横を歩くラビ。神田もあせりめたようにそのままラビと共に室長室に向かった。

【第1話】不安な呼び出し～神田ユウ・ラビ～（後編）

きじつん「第一話です～なんとか書きおしました」

ラビ「でもまだ俺ら教団にいるんさね？」

きじつん「…いましばらくお待ちください」

神田「おー、テメ～勉強はぢりした」

きじつん「ギクッ…だ、第一闘門（の試験）はとつあえず終わつたんだよ？」

ラビ「でも次の試験まであと20日や」

きじつん「うう…「メンナサイ」

神田「まつたく、我慢を知らねえのか？」

きじつん「お預けというものが苦手なのです…ほんとに」

ラビ・神田「「はあ…」」

きじつん「そんな二人してため息つかなくとも…ただ、今頭の中にある話は出し切りたいんだよお」

神田「あきり三「無理です（きじつん）」

ラビ「早つ…？」

きじつん「…こんなきじつんですが質問、意見などありましたら喜んで受け付けますので」

ラビ・神田「「これからもバカとエクソシストと召喚獣をよひしへ

「や」「頼む」

きじつん「あ、長いから『バカエク』でも…い、つー？神田さん、
そんなに睨まないでください（泣」

ラビ「響きがちょっとなあ…」

【第二話】不安な呼び出し～コナワー・ワー（前編）

実は…ついいつ暴露話は後書きにして…

今回はリナリー視点で、コマタさんに呼び出されます

【第二話】不安な呼び出し～リナリー・リー～

陽射しのまぶしい夏のある日

任務から帰ったショートヘアの美少女リナリー・リーは、教団の室長でもある彼女の兄のもとへ向かっていた。もちろん任務の報告のために。

「ただいま、兄さん」

「おつかれり。リナリー、怪我はなかつたかい？？」

室長室の扉をあけると、両手を広げた兄、コムイ・リーが満面の笑みで出迎えてくれた。

その兄と言つのもシスコンの中のシスコン。この文章の中で表現しきれないのが申し訳ない。

「大丈夫よ」と微笑みかけ任務の報告をする。今回はイノセンスは無い、いわゆる『ハズレ』の任務だつたが。

リナリーが一通り報告を終えると、コムイは「そうだ！」と何かを思い出したようにリナリーを見つめていた瞳をいつそう輝かせる。

「」の後また話があるから、ここに来てくれるかな？

…兄さんはちやんと報告を聞いていたのかしら。

キラキラと自分を見つめている兄の様子に、そんな一抹の不安を覚えながら「分かつたわ」とリナリーは部屋を後にした。

任務の汗を流し終え再び室長室へ向かうと、兄の姿が見えない代わりにソファーにはすでにラビと神田が座っていた。

「あら、二人とも兄さん呼ばれたの？」

「ああ。つたくあいつは自分から呼んどいてどじほつつき歩いてんだ」

「きっと、またリーバー班長にでも追っかけられてるぞ。リナリーは任務帰りさ？」

「ええ。さつま帰ってきたの」

不機嫌そうな声色の神田と、おかえり、ヒリナリーに笑顔で声をかけるラビ。

神田は相変わらず腕を組んで座つたまま、扉の前にいるリナリーに顔は向かない。だが、その背中はおかえりと言つて居るよつに見え、リナリーはただいま、と微笑む。

ラビがポンポンと自身の隣のスペースを示すので、それに従つてソ

ファーに腰を下ろすとそれと同時にまた、しかし遠慮がちに室長室の扉が開かれた。

「失礼します……つてあれ、コムイさんせ？」

ひょこっと顔をのぞかせたのは、白髪の少年、アレン・ウォーカーだった。

まだ来てないわ、というラビの横で、「ちっ、モヤシもか…」とつぶやく神田の声をアレンが聞き逃さずもなく

「なんだ、神田もでしたか」

と、今にも（恒例の）小競り合いが始まろうとしていた。だがそれは待ち人の登場によつて幸運にも（？）遮られる

「みんなお待たせへ。さあ、アレン君も座つて」

ヨツシーのマグカップを持つて笑顔で現れたコムイ。

しかしその後ろで書類を持たされて（おそらくコムイのわがままに付き合わされたのである）疲れた面持ちのリーバー班長を、そこにいた（コムイ以外の）全員が気の毒に思つたのは言つまでもない。

【第二話】不安な呼び出し～リナリー・リー（後書き）

リナリー「やつと登場出来たわ。ねえ、前置きの部分長くない？」
あいりん「そうなんですよ。本来ならすぐにでもバカテスの世界に飛ばすべき

なのですが…どーしてもログレの世界が広がってきて」
リナリー「で、短いながらもキャラ」とに話を分けちゃつたと
きこりん「お察しの通りで…でもやつとみんな揃いました！」
神田「おい、前書きで述べた『実は…』って何だ？」
きこりん「そうだった（・・・）それなんですがね」
ラビ「リナリーをメンバーに入れるか迷つたって話さつ。」
きこりん・リナリー「…!? どこからその話を」ねえ、それって本当なの？」

アレン「二人とも台詞がかぶつてますよ」
ラビ「コマイから『僕のリナリーをメンバーに入れないなんてひどい』

つて愚痴られたさ（苦笑）」

あいりん「それ言わたんですよ、うちの中じるコマイさん」…

アレン「やついえば」、もはやネタばれしてません?」

あいりん「…あらすじでばらしてる部分だから（まだ）大丈夫！へ

へ・」

リナリー「いんなおおぞりぱな作者だけど、質問意見は喜んで対応するらしいわ」

ティーンズ「…バカとエクソシストと召喚獣をよひじべ」ね
さ」頼む」

あいりん（私の中でのティーンズつて…？）

【兼因語】 パバヤの話(1)（前編）

やつとだ！

といひといひ詮び出つの正体が分かります。長いお待たせいたしました（と詮びても回りこまだなさ…）

やつと今回も暴露（^~^）裏話を…

【第四話】コマイの計り

「君たち、学校に行ってみないかい？」

「ここに」と上機嫌のコマイが椅子に座るなり言った言葉は、エクソシストとして田々AKUMAと戦っている彼らにとって、一瞬だが、理解しがたいものだった。

「学校、ですか？」

沈黙を破ったのはアレンだった。それに続いてラビやリナリーも疑問を飛ばす。

「コマイ、いきなりどうしたんだ？」

「やうよ。それに私たちにそんな暇はないんじゃない？」

神田に至つては腕を組んだまま「何を企んでやがる」と言わんばかりに、コマイを睨みつけていた。

そんな彼らにコマイは言葉を付け加える。

「もちろん任務がある時は任務に行つてもいいよ。けどみんな、学校に興味はない？」

全員が「ひつ」と言葉に詰まる。

エクソシストとして幼いころから教団にいた神田、リナリーに加え、ブックマンーとして各地をまわってきたラビ、それに実の親に捨てられてから、養父と無鉄砲な元帥により育てられたアレン。彼らは皆、学校と言つところに行つたことはなかつた。

エクソシストとして、AKUMAを救済するために今までを生きてきたと言つても過言ではない彼らだからこそ、学校と言つ平和に思える世界に興味はあつたのだ。

「僕はそんなみんなに、学校と言つたりを経験してほしかつたんだ」

もちろんいい意味でね。と、それぞれの心を見透かしたように、ロムイはやさしく言つ。

「それに、一度良い学校を見つけたんだ。リーバー君、みんなに資料を渡してくれるかな」

そこでやつと、ずっと立つていたリーバー班長がはつとしたようにな動く。

「…もしかして立つたまま寝てたのか?なんて疑問はどうあえず置いておくとして、全員が渡された資料に目を通す。

「ふみづち園？」

「日本か？」

ローマ字でふられた読み仮名、「神田が反応する

「さう。 と言つてもそこは並行世界の日本なんだ。 そしてその学校は、他とちよつと変わつてゐる。 そこが君たちに一度良いんだけどね」

「どう変わつてゐるの？」 トリナリーが聞くと、「よくぞ聞いてくれました！」 とコムイが立ち上がる。

コムイの話によると、その学校では個々人のテストの点数によって試召戦争というものが行われているらしい。 結局戦うのが、と同一はこつそりとため息をつく。 しかし戦うのは本人ではなく、召喚獣

といつ自分の分身だという話だ。

「でもちよつと待つてください。 ラビはまだしも、僕たち勉強すらしたことないですよ？」

「だから学校に行くんだよ」

あつからかんと黙つてのけるコムイ、「それもそつかとうなづく四人。

「どうあれ、何の学園長に話せりか。ま、」
「さ

そつ置いて渡されたのは男子は青、女子は赤を基調とした文円学園の制服だった。

【第四話】ハイハイのホリヒ（後編）

あいづん「ふー、やつと教団を出ますよ」
アレン「まさか今だと進んで行きますね。読んでくださった方、
お疲れ様です」

あいづん「そして書いていて気付いたことがあるので、

リナリーの時の話をちょこと手直しがあります= 3
神田「ちょっと待て」（ガシツ）

あいづん「はー?」「あいづん「あー..」

ティーンズ（（（忘れてたのか）））

あいづん「それなんですがね、時系列について悩んでたんですよ。
出来ればログレの設定をずらしたくないけど、アレンの
イノセンスを

クラウン・クラウンにするところをどうするか迷うし

…

ラビ「で、結局のところ..」

あいづん「方舟を出さないとバカテスの世界に行けないので、

リナリーの髪形を直しますつ= 3

アレン「…走って行っちゃいましたね」

ラビ「あれ、書置きがあるわ…『リンクを出すかはおこおこ考えま
す』」

リナリー「相変わらずおおぞりまね」

神田「はあ…本当に進むのかこの話」

…頑張って進めます。ここからはのんびりになると思いますが。
意見質問ありましたら喜んで受け付けますので、これからもよろしく

くお願こします！

【第五話】転校生（前書き）

とうとうバカテスの世界に入ります！

【第五話】転校生

ある晴れた夏の日の朝の事

文月学園二年Fクラスに、ある一報が届いた

「…転校生がこのクラスに入るという情報を得た」

ムツツリー二こと土屋康太はスタタタ、と小走りに教室に入るや否や、そこにいた観察処分者である吉井明久とクラス代表の坂本雄一に耳打ちした。

「二の中途半端な時期に転校生だと？」

雄一の言葉に、冷房のない教室でうだうだしていたFクラス全員が敏感にも、その場で耳をそばだてる。

「どんな人かわかる、ムツツリーー？」

「男が三人…」

男かよ。なーんだ。という空気が教室に広がる。だが次の「…と美女が一人」という言葉で、そこは一気に色めき立つた。

「なんだかわくわくしますね」

「どなんどこるかしら」

「いいでじばりく待つよいつ、元氣」と通された部屋に四人はいた。たくさんの机や椅子そして数えきれない量の本が並ぶ様子からして、そこは図書室なのだろう。木漏れ日が差し込みむせかえるような紙の匂いに、それぞれがブックマンの部屋や室長室を思い出しながらそわそわと呼ばれるのを待っていた。

コムイの勧める、と言つところに不安はあったものの、こぞ学校に足を踏み入れるとやはり期待や興奮があるもの。それは言葉に出したアレンやリナリーに限つた事ではなかつた。

「しつかし、編入早々試験を受けさせられるとは思わなかつたさ」

少し離れたところで本をめくついていたラビが苦笑いで言つ。彼らは先程まで、召喚獣の強さのもとなる点数を確保するためにテストを受けていた。もちろんそれまでテストといつものを受けたことが無い彼らにとって、それも貴重な体験の一つとなつたのだが。

「そうですね。数学や英語は何とか分かつたんですが、国語はちょっと…」

「神田なら読めたんじゃない?」

「いや、俺も日本語を学んだことはない」

日本の学校であるため問題もほぼ日本語。それが彼らにとって少なからず壁となつていたようだ。

すると突然、図書室の扉が開かれた。そこに立つていたのは、先程

の試験で監督をしていた西村宗一といつ、いかにも体育会系な体つきの先生だった。

「編入早々の試験、ご苦労だった。これから教室へ案内するからついでこい」

そして四人は 最下位クラスFクラスへ、編入した。

その頃どこから漏れたのか、あらゆるクラスの男子生徒が授業中にも関わらず、しきりに廊下を気にしていた。もちろん、『美少女』を見るためである。その様子を呆れたまなざしで見ていた女子生徒だったが転校生が通りかかると、そのまなざしを好奇の色に輝かせた。

「…なんだか随分見られてません?」

「そりや、どう見ても日本人の顔つきじゃないからなあ

珍しいんさ、とあくまで軽く受け流しながらも目の合った女子に手を振るラビ。その様子に頬を染めた生徒の数知れず。神田は馬鹿らしいとため息をつき、さっさと歩いて行ってしまう。

物陰からそれをカメラに収めている人がいるなんて誰も気づかなかつた。

「……最新情報」

ムツツリー二が息を切らすことなく、しかしすばやく教室に入ってくる。教師不在のため自習となっていたFクラスは、ムツツリー二の言葉の続きを聞こうと一瞬にして静まり返る。

「一人は日本人、美少女はアジア系…おそらく中国人、他の二人は良く分からぬが西洋系の顔立ちだつた。」

そう言つて先程撮つてきた写真をピッと目の前に掲げる……随分とローアングルのものが多い

「…一枚500円」

教室の隅で男だけの、静かながらも熱い競り^せりが始まつた。

「さすがムツツリー二、情報が早いな」

「ドイツ出身はいるかしら」

雄一がその輪から離れたところで感心していると、ドイツからの帰国子女である島田美波が尋ねてくる。彼女もまた、日本語が読めずに試験で苦労していた一人である。

そこに、立てつけの悪い扉が音を立てて開いたかと思うと、鉄人二と西村先生が噂の転校生をつれて教室へと入ってきた。

【第五話】転校生（後書き）

やいづん「いつもより遅めでお送りしましたーそして場面展開の多く、

読みづらくて申し訳ありませんvvv・」

雄一「とひといひ俺も登場だな。まだ転校生とやらひいてはいな
いが」

やいづん「それは次回のお楽しみで」

…ソリで参考までに。Hクソシストはログレでは英語で会話している、という設定ですがここでは物語の都合上、バカテスキキャラとも日本語で会話が成立しています。理由づけは何とか考えますが、無理やり感あふれる後付けになると悪ついで「じ〜承くだわこ〜」

—) ^

それでは、意見質問あつましたら喜んで受け付けますので
これからもよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7649z/>

バカとエクソシストと召喚獣《イノセンス》

2011年12月25日23時45分発行